
元はチンピラ。今世もチンピラ？

るー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元はチンピラ。今世もチンピラ?

【著者名】

ZZマーク

【作者略歴】

一
ル

【あらすじ】

主成分。俺TRUEEEE。HISという皮を被つただけ

クロス先の性格と一緒に、本来を掛け合わしたORIMURA。

駄作量産に定評のある「HIS」作者。

よつは、空前絶後の駄作

原作をアニメで観ただけなので、あしからず

ラウラ・ボーネウイッヒ 上

「んな、チンピラ相手に……」苦労な事であな……

思考するは自身の境遇。 そう境遇……何せ彼は

高速で空を切り裂きながら……相対する者に對して哀れに思いつつ
P-HCを微細に操る。 迫り来るレールガンを“ 挑発するよひに紙一
重で避ける為に ”

感情が手に取るよう分かる。 苓立ち、怒り、驚愕、理不尽

若いですな……

「」と“ 変わらない年恰好 ” の少女に對して

と詰つて……当たつてやれるわけにゃいかねえでぞ。 こいつどり
……もへ、コレでおまんま食つていくしかないですしね

そりに放たれてくるサブマシンガンの雨。 何時の間にかレールガン
の射程よりも接近されておるも

……相対する者が纏う機体の一世代も下。 そりには量産機でありな
がらに

？を出しですか……？軍人さんなら、もつとスマートに闘りな
や

さんな

弾雨を 記憶に残る“竜騎兵”を駆つて闘つたままに

本当……チンピラのあたしゃ、何ぞ、じんなんやつてゐるんで
しうね

馳せゐは“前回と思_{おぼ}しき《人生》”

幼い頃……いや、生まれてきた時から知つてゐる。剣の振り方も“こ
んな馬鹿げたモノ”を扱うのも

あの全身を鉄で覆う“モノ”とは違ひ。現在、彼が操る“モノ”は
相対的な姿

何せ……頭部装甲なんぞない。手と足に必要最低限と言つのもおこ
がましい……どう見たとしても

フォルムの体裁を取つてゐるだけ程度にしか彼には思えない。それ
も仕方ない

何せ

力力力……絶対防御ねえ……

唾棄するように嘲る。唇が作り出す。その表情を

全てのモノに備わつてゐる操縦者の死亡を防ぐ能力。発動すればシ
ールドバリアーをゴツソリと持つていかれる代物

イイ時代になつたもんさ

嘲る。合当理がつたりが促した風を斬る音は……ピヒ。イナーシャルキヤンセラーによつて“彼にとつて”は無音と化し

そう。イイ時代さあ…アタシ以外の奴にはねえ…

嘆くと言つわけではない。しかし 薔てのよくな、地獄の釜で只管に踊り狂つたような双輪懸は無くなつた

元から無い。命を懸けるような戦いが

「」にはない

「貴様あああ！！逃げてばかりかあ！」

オープンチャンネルから響くは少女の甲高い侮蔑。どこか硬質を感じさせ、幼さとは関係の無い相手を身震わせる怒声であつと

「カカカカッカ！！」

嘲るように特徴的な笑いで答える。《前の人生》においては自然に、《この人生》では意識しなければできない笑い声を上げて

追いすがる…“黒い雨”を驅る灰色の髪と変色した金色の瞳を持つ少女へと

鼻で笑うよつな表情のままに

彼

織斑一夏はコロッセオを背に天高く太陽を日指す

くつーAICOが完備していれば、物の数ではないといつにー！

“黒い雨”シユヴァルツェア・レーゲンを駆る少女

ラウラ・ボーデヴィッヒは心中で悪態をつきながらに太陽を日指して飛翔する

敵。日本が生み出した第一世代機：“打鉄”を追う

世界唯一の男性IJS適正者が聞いて呆れるーー。

常のラウラでは有り得ない程に激化している

無理も無い。何せ、彼女にとつて

こんな…こんな情弱の奴の為に、教官はー！

蘇るは“あの事件”。ラウラが唯一…尊敬し敬愛する。ブリュンヒルデの称号を持つ

織斑千冬の弟なのだから…

「はあああーー！」

第三世代機、それもラウラ専用機として特別にチューンされている
機体と

かたや第一世代機。それも量産された“打鉄”では性能そのものに
隔たりがあります

故に、いつも簡単に追いつけるのだが

「なぜだ？！？」

パワーもスピードも総てが凌駕しているところに 振りかぶ
ったワイヤーブレードは巻き払われた

「真っ直ぐすきやあぜ……お嬢さん」

「と……あたしも若っこじことですかい？いやあ……参りまし
たねー

心中で叫げるつもりではなかつた言葉に対し、自身で驚きつつ惚
けた様に零す

そんな事を考へてられるほど……一夏はラウラが繰り出す斬戦の
数々を軽く往なす

横一文字に払われた一閃を、“打鉄”のその無骨な甲冑の袖と見立
てる事のできるウイングバインダーを手繰り寄せて

一夏は自機では繰り出せないほどの強烈さを放つ一撃の側面をで叩
く事によって軌道を変える

それも その圧倒的な暴力を機体に。ウイングバインダーに伝わらないように。合氣道をながらに

袈裟斬りに放たれた一太刀を自らが持つ刀型近接ブレード。太刀によつて……打ち払う

ラウラが袈裟斬りの構えから走り出したブレードの柄を叩く事で肩の動き、筋肉の動き、間合い、呼吸 etc……そつ、初動。何もかも事を成す目前の仕草から

ラウラの行動を看破し、“打鉄”であつても……切り抜けられる段階から一夏は阻止する。総てを

「あああつあつあ……！」

「イイですぜえ……あたしゃ。一生懸命な人は大好きですよ」

雄叫びを上げて…ブレードを、マシンガンを、幾多の武装を持つて攻め立てるラウラ

いい感じの“仕上がり”で…後は釣るのみですね！

視界に入れる自機のヘッドギアに搭載された半透明のバイザーに映る状況。機体維持警戒域

スペック差は見えないところで確実に蝕んでいる。それをラウラは

気づかない

風下から追い立てるよひにサブマシガンを放ちつつヒセガリヒ刃を立てようとする

ソレに対して

「へえ…へへ。さあ、フィナーレとこきましようかい？お嬢さん」

サブマシガンを左のバインダーで受け止める。マシンガン程度あれば、外見からもその分厚を一発で理解できるぐらいの厚い装甲を唯一持つ部位。たとえ、近距離で集弾性が上がつていようが貫けないのは知っている

伊達に、幼い頃から “創始者”^{しののたばつ}と関わりを持つていやしない

押さえ込んだ銃弾をそのままに、突っ込んでくるスピードをカウントマーの要領で蹴り落とす

一瞬の押さえ込みにしかならないが 真の狙いは其処ではない

駆ける。蹴り出した反動でより高く…元々目指していた頂点。太陽のへと直向に駆け出す

そつして 激情しきつていてるラ・ウラは当然の如くに追う。猛追する

弾薬は切れてしまつていてるのだから、レールガンも、サブマシンガ

ンも…

激情のままに…厳しい訓練を重ねた戦士であろうと…本質は未だ少
女。絶対的な経験が不足しているが故に

ワイヤーブレードを構えて疾走する

それが 分かつ

通常。地球から離れれば、離れるほどに……増す。まるで見えない
手が引きずり込むように

重力の井戸から逃れるためには、駆け上がる速度を求められていく
のだ。比例するように

それはパッシブ・イナーシャル・キャンセラーでも例外は無い

幾らキャンセラーといえども限界はある。元が宇宙開発におけるマ
ルチ・スーツから派生していった経緯を見れば

上も下も無い宇宙で何処に向かって駆け上がる?

幾ら、天才^{たばく}が作り上げたモノでアレ……限界はある。天才が天才の
為に作ったのであれば…また違うかもしけぬが

作り上げたのはソレを渡され……現存する487機のコアをやりく

りするしかない国家如きでは当然

それも高々…一國家如きが技術を搔き集めて作り上げた。天才一人
にも勝てない傑作機

国が悪いわけではない。天才がおかしいのだから

なぜ…！墜ちない？！？！

追い縋るなか…ラウラは思う。眼前の機体の有り得なさを
いや…機体ではない。だが、しかし。ラウラはソレを認める訳には
いかない

何時　　己のシュヴァルツェア・レーゲンが錐揉み上げて墜落す
るか定かではない高度で

第一世代如きで傍目に悠々と上り詰める。その男を

必死に追い縋るラウラの心中に忍び寄る　　恐怖

「おお？！頑張りやすな…感心、感心」

声を上げることで集中が途切れそうになるほど限界域において

平常に離す男に対して

「ほんと、そういう一生懸命な方にやあ…惚れちまいますよ」

「ウラの瞳に映る。一枚の金色の羽。幻想

言葉が脊髄を伝つて脳に焼きつく

瞳が焼き付ける。

上昇の極点。バインダー方向翼を切った

くるりと… そうすんなりとした言葉が当たるまろいそなほどに

まるで奇術か魔術かのように… 反転する。上下を入れ替わる

重力総てが味方する方向へと 「ウラへと刃を立てる姿勢へと

ヴァーチカル・リバース
垂直反転

「インメル・マンター」
「金翅鳥王剣」

盛大な装甲の破碎音が鼓膜を叩く中

熱に浮かされたように、その言葉が聞こえる

視界に映る。一夏の姿がその小さな胸に焼きつく

ラウラ・ボーネウイッヒ 下

成層圏

辺り一面に散らばつていぐ黒の装甲片

青と白しかない視界の色にその黒は映えるように目をつくなか

「あれも……気を失つちまいましたかい」

インヘル・マンターン
金翅鳥王剣を放ち終わった体勢のままに

一夏は頭を搔きながら

「……仕方ありませんですか。私の柄じゃないんですね…」

苦笑と共に洩れ出る言葉を皮切りに、墜ちいくラウラ。その小柄な体が重力に導かれていく様を追いかけだす

一方、一夏がラウラを墜とした事によつて…

こひらは

「一夏さん……」

地上から遙か彼方へと飛び立つ被保護者の安否を気遣つ

短髪の緑髪。背丈は一夏よりも20㌢ほど低く年齢は今年15歳となる一夏に対しても成年といつ違ひの差

そして 彼女を端的に表すは…その巨乳。本来彼女が属する組織ではトップを張るほどの大きさを持つ

童顔に眼鏡を掛けた心根の優しい女性。山田真耶

「いーちゃん」

再度、虚空へと問い合わせた憂いの言葉は轟音に焼き消された

小柄な体に不釣合いな破片。シュヴァルツェア・レーゲンの装甲の残骸を纏ったラウラの思いの外早い墜落

追いかけている一夏は残り少なくなってきたエネルギーを榨り出すよみに滑空していく中

意識^{バイザー}下投影に一通のメッセージが着く。やけに『コテコテとした』テフオルメのウサギ耳のマークが付いたメールの形で

「力力……時と場合を考え貰いたいもんですぜ」

送り主が広義的な意味でそんな事を考慮するわけがない。広義的な意味では ならば

メールが自動再生される。一夏が滑空しながらも田前へと到達したラウラを拾い上げると同時に声が響く

「やつほー。いっくん。またまたお姉さんから宿題だよー」

間延びした声音。能天氣な声音。けれどもその声は無邪気に聞こえながらも

「問題です！小さなウサギさんを狙つたつい獵師さんが大勢やってきました！」

微かに聞こえてくる。耳元に悲鳴のよつた不安を押し隠さないままに叫ぶ真耶の言葉に搔き消されない

無邪気でありながら悪意を感じさせる様な

「わたくし、いつくんはどうするのでしょうか？！答えはお姉さんと今度会った時に聞かせてね？」

一方的に告げてメールは消失する。塵^{ロダ}一つ残さず。だが

そんな物に構つてられないほどに夥しい数の

「いーちゃん……」

「そう、大袈裟に呼ばなくても聞こえますつてもん。マーヤ嬢ちゃん」

「叫びたくもなつます！っていうか……いーちゃん！また私をお嬢ち

やん呼ばわりしてる？！」

「まあ、心中はお察しできますがね……私も四度目となつや、一いつ、驚くのも無駄な労力かとね。思つわけでして」

「軽くスルー？！酷い！私の方が

真耶が見当違ひな喚きを洩らしている間に、無邪気な悪意^{イタズラ}が飛来する

此処。「ロッセオ仕様のアーリーナを持つドイツ軍のミサイルランチャーの弾頭が一夏へと迫り来る

「では、後ほど

「ええ？！」

サクッと切る。アレで喚いていながらも仕事は（・）できる女

「数は二十。弾頭種目は…ローランドV-TX。捨てた装備を再活用ですかい」

意識^{バイザー}下投影内に表示される迫り来るミサイルの歯を見つめながらに

近接信管。予備起爆に触接信管ですかい

真耶から送り届けられるデータを流し読みしながら、量子化した“打鉄”の長刀を構成する

設定電磁波は……

読み流す内容の中の一文に 口元を皮肉げに、ともすれば喜びに震えるよ^ヒ……歪めながら

「へ、へ、へ……」

“打鉄”を消す。滑空していた状況は真っ逆さまに落ちていく姿へ
EISースのみとなつて両の腕で抱く意識のないラウラの手を取り
自身の首へと巻きつけて

胸元で片手で抱く

剣理殺人刀か剣理活人刀か

抱いた小さな肩。遠い遠い記憶の彼方を思い出しても抱いた事など
終ざない人生

チンピラだ。国を売る。売国奴になつて小銭稼いで……その口暮
らし

らし

楽しい事が自身に起る事などありはしない生き方であつたが
瞳に焼き付けてきた

チンピラはチンピラなりの筋を通し、生きた。“あの”生き辛い世
界でありながらも

一生懸命…生きた命達を見届けた。何の因果か一度目の人生

今度は…真つ本当に生きてみますかね。と決めたからにやあ…

「半端はできやしやせんな？ “警察の口那”」

瞳を閉じる。焼きついた命の一つの姿。陰気な顔を下げる男が浮かぶ

「久しふりの……陰義になりますかね！」

雪車町一蔵チンピラは……織斑チンピラ一夏として生き始めていた

田たを覚おぼませば……げんそう舞踏まいとうの中に墮おちると錯覚さくかくした

ソレが薄田を開けて、ボヤけた意識の中で初めて認識した感覚であった

ラウラ・ボーデウイヒにはそつとしか認識できなかつた

なぜならば 飛来するミサイルを仄へいく断ち斬きつたという現実乖離かいりした現象を見れば

そう思つのが当たり前だ。何せ 断ち斬きつたと完結しているのだ。ミサイルという物の結果が爆発で終わるしかないはずなのに

だから より一層と思考が乱雜になる。ソレが軍人としてのラ

ウラ・ボーデウェイヒを麻痺させ……少女のラウラ・ボーデウェイヒを強く振り起こす

何せ……

ああ、私は、夢を、見ている

男の胸元に抱かれて死線を優雅に越えている

ラウラとて一端の少女だ。幾ら、遺伝子強化試験体の試験管ベイビー出だと見え

乙女であることに変わりなく……特に最近は副長のクラリッサから変な知識を吸収している最中故に

夢なら……覚めないでくれ

虚ろな意識の中。薄く開いた視界の先は　死線でなお、少年の
凛々しい顔

口元が釣り上がつてはいるものの、少年特有のあどけなさと大人顔負けの深み。その両方が作り出す

惹きつける笑みを焼き付けるように

その太刀が繰り出す神秘に等しい剣技を焼き付けるように

薄れいく意識を徐々に手放した。胸に宿つた……初めての感情に戸惑いながら

さて、時は進み…一夏と真耶の姿は現在は空の上の椅子

国際IIS委員会^い用達の簡易IISハンガーを積載する専用機での空の旅路へ

「で？ドイツさんは」納得と？

「まあ……篠ノ之博士が関わっているとあれば、黙るしかないですからね」

窓際から雲を眺めながらに頬杖をついて真耶へと問い合わせた一夏へと返される言葉

心中、お察ししますといつニコアンスが強烈に醸し出される哀愁を誘つ雰囲気のままに告げる

「腰曲げられて…お飯取り上げられる訳にはいかないと」

「はあ…。コレで通算四度目。ソレでも各国の偉い人はいーちゃんを呼び出すのですから始末に負えませんねー」

肩を落として、疲れたという表情を浮かべる真耶へと

「まあ、私や根無し草の身ですんでね……哀れなチンピラに宿を提
あたし くにな
じくせき

供してやれりとこゝ慈悲深い方々なんですよ」

一 夏の皮肉げな言ひ回しは……世界唯一の男性HS操者といつ厄介
きまわりない肩書きを持つ故に

何処の国も喉から手が出るほどに欲しい人物

「いーちゃん……やうやく、そのチンピラつて言い方止めた方がいい
ですよ?」

好ましくないとこゝ表情をあつありと浮かべながらに鼻の上に乗っ
かるよつに掛けた眼鏡を直しながら指げるわ

「性分でさあ……勘弁してくれせえ。マーヤ嬢りちゃん

悪戯小僧そのものの笑みで答える一夏

「また!…いーちゃんはそつやつて、すぐにからかう!…私の方が
年上なんですからね!」

身長差も気にしての発言であるが

「いーちゃん。いーちゃん。と洒落た呼び方をする方にやあ…丁度
いい呼び方でしてね」

何処吹く風と言わんばかりに告げる。瞳の中を笑みで染めながら

「で?今回もですかい?」

「わ…。今回もです。前回の“打鉄”は修復が間に合っていないの

で三機の予備を次回は使用します

軽く溜息を吐いて諦めた真耶が自身用に持つてきているHS“リヴァイブ”のソースを使って中空にウイングを開いて

状況を説明する。二機の予備の内
現実

コア自体にはダメージが入っていないが相対する機体が毎度の如くに一世代先かはたまた最新鋭の強化改造を受けており

そのドレもが国家代表候補の有力者となれば

「いい加減……いーちゃんも専用機を頂いたらどうですか？篠ノ之博士が用意なされているのでしょうか？」

「まあ……一理あるんでしょうが、どうも……ね。そもそも為に四度の襲撃？というべき罷があつたりと……」

クツクツと品のない笑みで返す一夏

「わかつてゐるなら　」

真耶が現状を招いている原因を分かつてゐる一夏に更につのりつとするも

「だから、こそですぜ？態々、そんなちよつかいを掛けてでも使わせたい機体がどうにも」

人差し指を真耶の口元を押さえるように立てて押し付け

「^{あたし}私にや……キナ臭いんですわ」

頭を振つて元の視線の先。窓の彼方を見やる

「はあ……いーちゃんの言い分を理解できてしまつ私が恨めしいです」

「力力。あの変態博士は適度に相手するのが一番でさ」

「…………話は変わりますが、いーちゃん。どうやってアレだけの……その……」

「ああ、ありや……ですな。信管はマーヤ嬢ちゃんが調べてくれた通りでしたからね。簡単で」

向けた視線を真耶へと戻して一夏は手振りで示す。あのミサイルの群れを処理した状況を

「ま、ね。ISをね戻したんですねわ」

量子化^{パッケージ}したと表す。電磁波感知がISを装備している状態ならば必ず洩れ出る稼動エネルギーの波に設定されているが故に

「へ?……戻したって、え、でも太刀は持つてたじやないですか? !? !」

通常、ISの装備はISの補助無しでは到底人間一人に持てるのものではない

ソレを分かつている真耶が素つ頓狂な叫びを上げるのは必然で

一夏がそんな真耶の声に用意万端で耳を塞ぐのも必然。尚も喚き立つ真耶に対し再度唇を塞ぐよう人に差し指を立てる

「家の姉さんとて素でおやりになるかと……思いますがね？」

「先輩といーちゃんの感覚を一般人に求めてもらいたくないな……代表候補生。つて言うかモンドグロッソ出場者でも片手のクラスだよ……」

ウンザリと肩を落として嘆く真耶は続けて

「持てたのは分かったんですが……ソレでどうやって処理したんです？」

「何、信管の作動条件が分かってるんでも……よつは満たさなければよろしいという訳でして……」

一夏は人差し指をミサイルに見立てて

「こう、信管部と弾薬部を割いただけで」

見立てた手とは違う人差し指で指の第一関節を叩き斬る様な仕草で押し当てる

表情は付き合いの長い真耶等以外には完全に嘲笑ったような癪に障る笑み

「予備動作の触接信管を起動させないほどの剣速で分割したと……
バックアップ

…

もつ吐れて事実しか言葉にならないといつ表情で真耶は呟くしかなく

「最新なればなるほど……爆弾やハサウエイやの誤爆つては起き
辛い代物ですからね……く、く」

「…………まあ、どうせ今回の件も相手方には一ちゃんのは何も
残らないのじょからこいですけどね」

「その点に関しては……変態博士様々と言つべきですね……カアツカ
カ力」

「もう、またそんな笑いかたをする…」

一夏の笑いに文句を告げて、肩を落として「一つの苦勞
が背負う苦勞と自身が背負う苦勞レーハを忍ぶであつた……

ドイツ　IISプロトコルー

「ええい……何とか、食い止められんのか?！」

壇上にて男が吼える。場所はこのコロッセオ仕様のアリーナの心臓
部であり司令部

その場所にて一等立場が上の者が陣取る場所であるのは傍目にわ
かり……そんな者がうろたえていふといつに

無駄でしちゃうね。アツチの方が一枚一枚という次元ですら…
計らせて貰えないほど上手ね

ラウラが隊長を務める“シユヴァルツェ・ハーゼ”女副隊長。クラリッサは眼下に広がるオペレーター達の様子を冷めた目で見やる
その膝に愛しき血の隊長であり、護るべき少女を横たえた姿のままに

現行の状況。一夏とラウラの模擬戦とつ於ける各種データに狂喜乱舞していた者達は

早速データを検証及び整理へと着手しようとするとモニターにデカデカと現れたデフォルメのウサギ耳が出現してからは

阿鼻叫喚の地獄絵図。まあ…慌てふためく彼らにとっては

「うひ…」

「…お目覚めですか？隊長」

意識を失っていたラウラが目を覚ましたのに気づき優しく声をかける

一夏から受け取つてからこのかた…ISの性能を無駄にフル活用してバイタルチェックで無事は確認取れている

まあ……そういうことで自身で看病するのを優先した為に現在、ラウラとクラリッサはオペレーター室内の隅っこで二人

喧騒とは無縁の空氣で言葉を交わす

「副長…………あの男は？」

「もう、旅立ちました。予定が詰まっているのは訪れる前から仰っていましたので」

「わづか……」

呟いてそのままラウラは目前のモニターに映る「デフォルメウサギとは別に、現在進行形で消えていくデータ類の中

そのモニターの一枚に映る。自身を抱いて、ミサイルの群れの中で少年と大人を分割したような笑みを浮かべ口元歪ませる少年を見据える

「副長」

「はい」

「娶りにいぐぞ。^{フォロー}補佐を頼む」

その姿は弱弱しく見えるが…纏つ空気だけは威風堂々としたラウラは宣言し

「お任せを」

日本の少女マンガの大ファンという側面を持つ

副隊長は愛しき少女の為、手にした間違つた日本の知識をフルにいかしていくのであった

セシリア・オルコット 上

GB 海商都市リヴァプール

ん……此処の人達や……胃袋が頑丈らしいことは理解でき
やしたな……

露天商から買つた所謂、フイシュー&チップス。白身魚のフライとポ
テトを食い歩きながらこ

一夏はそんな事を思つ

さて……現在、一夏が居る場所は 正式名称、United K
ingdom of Great Britain and No
rthern Ireland

如何せん、イギリスといつこの名所。リヴァプール

かのユネスコの世界遺産に登録された美しき港町の一画を持つ都市
であり

しかし、HSは本当に便利な物ですね……

そんな異国において一夏一人が好き勝手動けて会話に困らないのも

… HSの自動翻訳システムのおかげ

まあ……その恩恵を受ける者入れば、とばっちり 勝手に市街へと

繰り出した一夏を探索する羽田になつた真耶 を受ける者も居る
が…

現状、一夏は今一度… ISといつ代物に対しての便利性を理解し…
街中を散策する

ふーむ… 一度はビー ルズの発祥地を拝んで見たいと思つち
やいましたが… じつ、感慨つてモノには縁がないみたいですね、 私や あたし

近くを走る水路に沿つよつて視線を進めると

夜景なれば、尚よし……と普通は言つんでしょうがね…

ビーフモーハンにも、気分転換に繰り出したはいいがイマイチな状況に

チンドラが如きにや… 文学も美術も理解できやしないと

見切りをつけて……この地での相互評価試験。様は一夏の「データ採取
を目的とした模擬戦闘が行われる予定の

アリーナへと向かおうと 裏通りから表通りへと出ようとする

刹那

「さやつ?…」

「つと…こいつは失礼」

出会い頭に衝突。一夏はのんびりとした歩調で歩いていた物の… 海
外に多い路地裏の細さが仇となつて

急いでいたのであらう……豪奢で豊かな金髪を蒼いカチューシャで止めた年頃が同じぐらいの少女は前方不注意によつて

「もう！淑女にこんな姿を晒させるなんて……」

一夏の謝罪を受け取る事もせず、ぶつくわと言いながらに少女は立ち上がり

「わたし 急いでいます。極東のお猿さんを相手にしている暇はなくて」

相当イラついているのであるうか？たかだか、ぶつかつた程度で盛大にバッティングを浴びせて

足早に駆け出す。肩をイラつかせて足取りも大幅。茶色のブーツは石畳を踏み鳴らさんばかりの勢いで振られる姿に

「カルシウム…足りてないんでしょうかね…？」

侮蔑をものともしない…とこより前回が色濃く残っている一夏にとって

そんなモノは意識するべき事ではなく、むしろ息せき切つて怒りを露にする少女を逆に哀れむという感じに

暫し、そんな少女を見やりつつも

「私も向かわなきやなりませんがな

思い起こして、少女が去った先へと進行方向を向ける。その先に

彼が目指す施設があるのでから

そうしてブラブラと所在無さげに、元来の根無し草的な部分も相まって街中の軒並みをつぶさに見やりながら

歩いていくと……

「おや？…先のお嬢さんじゃありませんかい

眼につくのマンホールの取っ手にブーツの踵、低めのヒール状になつている部分を捕られて

顔を真っ赤にしつづブーツを引き抜こうと悪戦苦闘する先の少女を見つける

が、其処は一夏。気に留めるも関係ないとその横を通り過ぎようと/orするも

「ちよっと？！淑女レディが困つているといつのに素通りですか？！英國紳士の風上にも置けない男ですわね？！」

叫ぶよううちに高に呼び止めてくる。若干、涙目なのがソソるような足を捕られて少女座りを余儀なくされた少女に

「いや、あたし 私や英國紳士じやありませんし……」

「ちよつ？！普通はか弱き淑女レディが困つてましたら男性ならば、助けるのが筋でございましょう？！」

「いや、あたし 私やお猿らしいですし……」

「げ……あ、貴方先ほどの……」

ああ言えればいつ直つ眞合な的に会話を交わす少女と一夏であつたが
……最後に返した一言に少女としてどうだ?といつ聲音で呻いた後

恐る恐る……マンホールに釘付けになっていた視線を確りと一夏の方
へと移し

「あ、あははは……」

乾いた笑いを上げるかのように涙田のままにこぢらを見つめる少女

流石に……先ほどの物言いは不羈過すぎる事を自覚しているのであらつ

ガックリと肩を落として

「…………お氣に入りでしたのですが」

未練を断ち切るかのように蕭々とした諦観のつまつた声音で少女は
ブーツを脱ぎだす

「素足で行くおつもりですかい?」

「ええ!そうですわよ!…どつかの誰かさんが予定外の訪問となり
まして、私!^{わたくし}今までの人生の中で一番急いでおりますの!」

そつして、傍田にも判るほどに悔しそうな顔でブーツを固定してい
る帶を外していく。田には本当に薄つすらりと

「……そんなに大切な物ですかい？」

「ええ！ええ！見ず知らずの男に対しても胸張って言い切れますわ！お父様とお母様が最後に贈つてくれたプレゼントでありますもの！」

最早、感情の揺れ幅が大きくなりすぎて絶叫にも等しい声音で言いつ切る

その表情と瞳が浮かべる真摯な想いは 織斑一夏の、雪車町一
蔵の大好きな感情。一生懸命。……ソレが宿す感情に似ているから
こそ

中空にて手を一振りする。現れるは

「あ、あなた？！」

少女にとつては見慣れた光景。量子化された装備を召喚する動作。
けれど 彼女は見たことが無い

男性がその動作を行うとこりうを

「失礼」

その一言告げて、召喚した兵装。フォールディングナイフ…と言つてもIFS戦闘に耐えれる性能を持たされた物で

マンホールの取つ手を切断する

「あ…」

「お急ぎなんでしょうか？早く行かなくていいんですかい？」

「え……あ……その、ありがとうございますわ……」

引っかかっていたブーツが開放されるも一夏の行動に呆然と見つめて固まってしまうおり

一夏が催促する事によつて意識を取り戻し、詰まりながらも礼を述べて足早に去る

丸くなつちまいましたね……私もあたし

頭を搔きつつ……此方へと振り返り振り返りしながら走り去る少女を見送つてから

斬つたマンホールの取つ手を…………当てる。再生するかの」とく
……ソレは見事に元通りとなつた

走つてゐるからだ

そうに決まっておりますわ

息が切れそなほどに走つてゐるからこそだ

この胸の高鳴りは

実際に…息が切れ始め、肩で吸つ様に呼吸を整えながらも

足早に歩く。金髪の少女は

まるで…何かを振り払つかのように

「ええー…さうに決まっておりますわ…」

アリーナの更衣室へと迫る廊下で盛大にそう宣言する

周りを歩いていた者達が突然の叫びにドン引きするのも田に入らない
ぐらこに

セシリ亞・オルコットは真つ赤になつた頬を晒しながら
歩いていく

セシリア・オルゴット 下

リヴァプール IIS専用アリーナ 女子更衣室

勘違いであった

ソレは更衣室に入り、走ってきたおかげで流れ出てきた汗を拭い去る為に…シャワー室へと入った時に

びりして

最早、走ってきたことによる息切れなど…汗の跡に収まっているはず

だが、現実、セシリアの胸は

チラつく。先の光景が

音を立つ。一つ

一つは拳。硬く握り締めすぎて白くなり、ずっと浴びている暑いシャワーによつて指先がふやけても

色艶も、その細長い腕と指が織り成すコントラストが崩れることがない手が…タイルの壁を叩く

もつ一つは

「鳴り……止んでくださいまし…」

シャワーの頭に搔き消されそのままぼんやり弱弱しく

されど、表情は浴びる熱い湯によつてではない

苦悶と憂いによつて鮮やかに彩られる。己の表情と同じ音色を刻む

ワインディング・ハート
心の鼓動

ギュッと瞳を閉じ、拳を胸元にやる

リヴァープール IIS専用アリーナ 格納庫

第一世代機。“打鉄”

日本国が生み出した第一世代近・中距離重視型全領域対応IIS

その無骨な武者姿に譬えられる。無機質で硬質な印象を与える甲冑に袖を通す

「いいですか？いーちゃん。もつ、予備で戦闘稼動が行えるのはソレ一機だけなんです…大事に使ってくださいね？」

真耶が困り顔にて一夏へとメツという感じに注意を促す

「へ、へ。まあ、気をつけられるだけ、気をつけまさあ…」

「もう！全力稼動したらEISの方が持たないつてビリにう体をしているんですか…」

陰鬱な表情のままに肩を落として溜息を吐く。千冬にしろ、一夏にしろ…どうしてこう

「私の周りの人は非常識な人ばかりなんでしょうか…？」

神様、私、何かしましたか？と薄暗い照明しかない格納庫内の天井を見上げながらに呟く

「力力…。」愁傷様で

「…一端である」一ちゃんに言われたくない

陽気に答えた一夏に対し、ジト目で軽く睨みつける真耶だが…高校生とも間違えられるほど童顔で迫力など微塵も無く

「可愛いお顔が台無しですか？マーヤ嬢ちゃん。眉間に皺を寄せるのは」

そんな真耶の反応に、一夏は眉間に“打鉄”の鋼鉄の長い爪状の人差し指を軽く押し当てる

「ひゃう？ー？ー！あ、わあわわ？！？！」

「力力。そう在つてくだせえな…根無し草と言えども、今の私にやかえるばしがない」

あ……貴方が居る場所だけが帰る場所なんですね……」

降ろす。その童顔なれど整つた鼻筋を伝つよつに指を下ろし

ふつくらとした唇へと指を乗せて告げる。愁いを帯びた眼差しで

「？…？…？…」

「カツカカカカ。もう少し…男に免疫を持たないとけやせんぜ?
あたし
私みたいなチングリに引つからんようにね」

最早、言葉を発する事も出来ないほどに茹で上がった真耶へと忠告
めいた笑いを上げて

「と、言つても…」の業界おんなじよたいじゃあ、土台無理、と」

小さく最後は呟くよつに叫ぶ。そんな一人に管制室より

「あ、IIS委員会所属。お、織斑一夏さん、カタパルトへと願いま
す」

女性の管制官の上ずつた聲音が一夏を案内する

「おつと…丸見えですかい?」コイツは失礼をば」

陽気にその言葉を残して　　一夏は飛び立つ

「その、せ、せんせいによければ…」一ちゃんがいいつていうなら

……い、いつでも

何が何時でもなのか？それは真耶にしか分からぬが、……彼女は一夏が飛び立つていったという事実も知らぬままに

身悶えながらに頬を上気して、瞳を閉じて乙女の表情で呟いたとさ

カタパルトの電磁^{リニアアクセル}加速に乗つて一夏と“打鉄”はアリーナへと飛び立つ

武装は全て、量子化状態の無手のままに中空へと身を泳がしていく
PICOが齧す頼りない感覚。素肌が風を切つていいくのは心地良いもの

「ひ、ね。どうにも…私は好きになれませんや…。」この感覚は
強引に切り裂くような風切り音の方が一夏には懐かしくもあり、新鮮な面持ちで回顧する

そうして、一夏が周りへと視線やり始めた時

相手方のカタパルトに火が灯り……蒼いシルエットが飛び出していく。その蒼い姿は一夏の対面へと一気に位置すると

「あ、な……」

「おや、おや…三度目の正直とでも言いますかい？」いや…また奇

縁という奴ですね」

「……そうですね。あの時の量子解除の時には分かつっていたものですね」

背部に四つのスラスター。脚部ユニットが他の走行パーシより肥大化されており

彼女は構える。量子化を解いた自機、“蒼い雲。《ブルー・ティアーズ》”の最大火力を誇る大口径素粒子狙撃砲　　スター・ライト
mk-IIII

その青と白のコントラストが奏でる…星を穿つ魔砲を構えながらに

「名を　　聞かせてもらえませんか？」

IIS間のコアネットワーク経由から響く。耳元に囁くような甘く切なさを込めた声音が震える

憂いを帯びた瞳。潤んで、その小さな眼。^{まなこ}愛機と同じ名^{じゆう}で見つめる

されど　　体は油断無く戦闘態勢
バトルスタンス

乙女としての顔と戦乙女としての顔。
フルキュー

恋も知らない純情を胸に抱え、焦がれる乙女と闘う乙女としての湧き上がる闘争心の狭間で揺れ動く

一人の少女が

一心に一夏を見つめ続ける。瞳は求めを、腕に抱えし砲身は拒絶を

相反する感情が本能のままに

「一夏。一つの夏と書いて一夏……あたし私や、織斑一夏と申しまして…」

向けられる瞳に…頭を搔きながらに蒼天を見上げる。憮々としてぐら
いに真っ青な空を見上げ、瞳を一度閉じ

観念したかのような面持ちで一夏は告げる。直向に向き合つ
少女の表情これ、口がもつとも愛して止まない姿なのだから

一見した態度は、とても優められたような態度ではない。だが
瞳に宿る色合こは

「It's…いち…か。イ…チカ。一夏」

「へえ、中々。日本語は初めてでありやせんのかい？」

無手のままに氣負うことなく、一夏は問う

ISに搭載された翻訳機能から生じた言葉ではない。生の音声が描
き出すたどたどしい日本語

Quench-Englishから始まり、ローマ……一句一句、
言靈を宿すよう元に魂と懸命をめるよう

その柔らかにしてふくらな薄いローズのリップを付けた唇が、奏
でる。一秒でも早く、その名が馴染む様に

自然と発音できるようになり、ただ、何の苦労も厭わずに……欲す
る者を

「……少々、機会がありまして、ですわ」

虚勢を張る。いと可愛らしい程のわざやかな反発

心と瞳は素直に求めるのに

体といつねの理性は脣を尖らして、

高飛車を演じる

プライドが邪魔をする…

「ですかい。……そろそろ、始めますかい？」

無手の手に長刀を現出させる。肩にリズムよく当てながらに問いかける

アリーナの中央で何時までも会話をさせておけるほどに　スケジュールと現地の欲の皮が突つ張った者達は待ってはくれない

IISといつ世界は…表の華やかさとは無縁と言えるほどに、裏は大人達の都合と霸権を争う生臭い世界

「ええ。……わたし ブルー・ティアーズ私の“蒼い零”の鎧と化しなさい!」

気勢を上げて、ブルー・ティアーズの背部ユニットの四機のスラスター。その末端部から四機の子機を飛ばす

BT兵器。操者の意思を反映し自由自在に空を飛び回る銃器。全領オーバーレンジ

全方位稼動型兵装

セシリ亞の意思を反映し、飛魚の如くに跳ねながら一夏の元へと迫る

右頭上後方へと一機、左腹部側へと一機、正面頭上の額へと狙いを定めたのが一機、そして後方左肩部へと回ったのが一機

本体たるセシリ亞機。ブルー・ティアーズの推進ユニットの一部を担う子機　　本体と同じブルー・ティアーズの名を冠された

「行きなさい……私の涙達よ……」
わたくし

号令たる張りのある掛け声が響く。打ち倒す意気込みとは反対の言
い知れぬ切なさが入り混じる声音が…

この一連の動作に掛かった時間は約8秒。実験色の強い兵装。BT
兵器の運用が未だ試験段階を越えていない現在で

その時間はかなりの早さであるが　　実戦。命を懸けた双輪懸の
刹那が分ける節目とは比べ物にならない位に

遅い

発射。発射。発射。発射。　　回避

四機同時攻撃、射角も同一線上にならないように配置されている為
に子機が同時発射しても、お互いへと当たらないように

死角から攻撃であり、正面からの牽制もあり、本命

つまるところ、必勝の攻撃方法であり　　「」の方法でしか勝つ手段がないと言つても過言ではないブルー・ティアーズの戦法も

歴戦の操者相手には　　余りにも拙い

「ひっ、へっ、へ、……私に当たるのにどれだけ掛かりますかね？」

自機へと迫つた粒子。同時四方向から飛来するビームの粒子を意図も容易く回避する

否　　放つた時には、最早離脱していた。瞬時加速を何の予備動作も無く

肩にリズムよく刀型近接ブレードを当てている姿を搔き消すようにその姿はセシリ亞の耳元で囁かれる

「？！」

「さて……頑張ってくださいな。あたし私の仕事の内に入るんでしょうが……当たつてやるのは失礼にあたりやすでしょ？」

「言われなくも……」

低い呻きのような笑い声を残して、再度身を踊りださせる一夏を追う

子機。ブルー・ティアーズ達……蒼き涙達の零す粒子の最中を泳ぐよつに避け続け

「一機一機に意識を傾けては意味がありやしない。もつと、三次元

に　　十が一であり、一が十であるみつ」

青白い軌跡が追い立てるように迫る中を、優雅に舞う

「全てが一個の群体であるように認識を変えなければ

」

コア・ネットワーク越しに語る。一片の緊張も焦りもない、淡々とした聲音で語る

片手に量子化を解いた太刀が現れ　　一夏は難ぎ払う様に投げ飛ばす。

太刀の柄に繋がった単分子ワイヤーによって一夏の片手を基点として　子機達よりも早い速度で旋回し

叩き落す。四機中、三機の蒼い涙達を

「？！？！なら、これで…！」

脚部の前方へと配置された一本のスラスターの先。それもブルーティアーズの姉妹達であり

先端の部分は　　ミサイルを蓄えたタイプ。噴煙を発して高速に。快速を求められた空対空ミサイルを発射する

量産機ならではに…各國に知らされている『打鉄』の主兵装たる刀型近接ブレードに手を取られている一夏へと

手を取られて…いるように見せかけた一夏へと

口元が歪む。面白じぐらこに引つかかってくれる

未だ 戦士としては幼い少女達は盛大に愚直であり、真っ直ぐ
ある故に

ワイヤーを切る。手放した武器に一警もくれず

引っ張り出す。フォールディングナイフを一本

高速で飛来する一基のミサイルへと投げ放つ。
爆煙をモノともしないままに駆け抜け

「高速で迫るミサイルを 投げナイフで落としましたの？！？」
「！」

「…叫びを上げてる暇はありやしませんぜ？」

セシリ亞の悲鳴じみた叫び声を、肉声で聞き取りながら仕掛ける

「あやつ？！」

「力力……お綺麗な顔であります」

“打鉄”の肩部装甲を前面に出しての体当たり

肉薄した体勢は、一夏にセシリ亞の頬に触れるほど の余裕を

「？！？！」

「どうこうせ… う、 私や心配になりやすね…… 敵ですぜ？ 私は」

顔を真っ赤にして硬直してしまつ。瞳は潤み……紅葉が差す頬

思わず、嘆息してしまつ一夏は

「 はあ…… 収穫したばかりだ？」

「 な、なぜソレを？…」

「 まあ、運用を見ていれば…… でしてね」

嘆息するようにボヤキ…

「 ところよりもですぜ…… 少しは手を叩くか、どうかのアクション
を起してもらいたいんですけどね……」

体勢は肩部ユニットを押し当ててからの懐への潜り込み

故に セシリアの頬へと遭った掌が赤く火照った頬の熱を伝える
整った容姿。白磁の肌、瑞々しい潤いを持つており、全体的に丸み
のある小顔を至近で覗き込む姿

「 あつ…… つ…」

一夏の言葉を耳に入れても…… 真っ赤なまま固まり続けるセシリアに

後頭部を搔いて、どうしたものかと思い出す一夏に

「評価試験終了。いーちゃん、直ぐに戻つてきただれこ」

「…………何か、ありましたかい?」

ドスを効かせて、アリーナに設置されたスピーカーから真耶の声が
流れる

嫌な雰囲気に一夏が気乗りしない声音でコア・ネットワーク越しに
アリーナの管制室へと連絡を入れると

「試験になりやしない。と言ひつ事ですよ」

イイ笑顔で答えてくれる真耶。その後ろには……溜息を洩らしながら
に頃垂れた姿の現地のイギリスの技術者達の姿

果たして、ソレはびっくりの意味で告げられた言葉なのか?

目前のセシリアの表情と真耶の表情を見比べ、真耶の背後の者達を
一瞥した後

「あたし
「私や、ほんとに……なんぞ、こんな場所に居るんじょつかね~
~~」

真っ青な空が懐かしごくらじで羨む

とつあえず、この場から逃げ出したい一夏であり…

「こしても……いー所のお嬢さんであるんでしょうへなぜに徒步で
向かってらしたんで？」

「あつ……」

口元を拭いて…今、思ついたところの表情を窺うやうシニアドであつた…

シャルル・デュノア

輸送機内

「そう……拗ねないでくれませんかね？」

機内席の窓際に座った一夏は疲れた聲音で

「うひうひ……」

隣に座る真耶の膨れつ面を横目に囁くよつと吐き出す

時はセシリアとの一戦が終わり、次なる招聘国へと向かっている旅
路の途中

あの一戦が終わってから、このかた……山田真耶女史の機嫌が急降
下を辿る一方であり

「……そりや、マーヤ嬢ちゃんを置いて招待されたことには……私の
不備もありますがね……」

疲れ切つた聲音で尚も紡ぐ一夏

「一応、建前上はマーヤ嬢ちゃんはスタッフなんですから……」

「……嬉しそうだった」

しかし、一夏の言い訳じみた言葉を遮り

「なにを、ですかい？」

「いーちゃん。オルコットさんのお誘い、鼻の下伸ばして受けた
……」

大きな胸を抱えるように人差し指と人差し指を突きあつてのイジケ

一体、何歳だ？ あんたは… といつ思いを胸に閉まって一夏は

「そりや… 私も男ですからね。見目麗しく、私の好みの方の誘いな
ら喜んで行きますがな」

好みの部分に関しては人格形成の半分。雪車町一蔵からの引継ぎで
あり

老若男女関係ないといつ一コアンスを含めて一夏は話すも

この状況で、相手の女性にソレを期待するのはナンセンスであり…
その点に関しては年端のいかない若造らしげ

益々、膨れつ面になり… 膝を抱えて座り込む始末

「… マーヤ嬢ちゃん」

「……好み。いーちゃん、私のこと好みって言つた癖に…」

「そりや、言いましたがね… 私の好みの意味分かって言つてやすか
い？」

一夏の言葉に対し……ぐるりとした瞳で見つめてくる真耶
膝を抱えて視線だけで見つめてくる故に 童顔でおっとうとし
た雰囲気は搔き消され… 一夏へと訴えてくる

その姿に大きく息を吐き、窓辺から見える雲を見据えながらに

「……貸し一つ。ここで勘弁してもらえませんかね？」

「…いいよ。でも千冬先輩には内緒だよ?」

姉さん相手に… マーヤ嬢ちゃんが隠し通せましたかね…?

隣でさつきまでの表情とは打って変わって、取らぬ狸の皮算用を始める真耶

瞳がキラキラと輝いており、まさしく夢見る少女を具現化している
も 隣の一夏はそんな真耶の発言に首を傾げるのみ

織斑先輩。一夏の姉にして 第一回“モンドグロッソ”総合優
勝者であり

元日本代表候補生たる山田真耶の現役時代の先輩兼、所属組織の上司

そうして ……ある意味では、真耶の天敵。そもそも一夏に対しても
る種の想いを抱く女性全ての天敵

「…はあ、前途多難ですね」

真耶の表情を見やり再び嘆息を吐いた一夏は、渡された資料

フランス代表候補生 シャルル・デュノアの開示情報に視線を走らせて

「ほんと……前途多難ですわ」

その資料に載る。性別 男でありながら、線の細い体。それを見つめて息を吐いた

フランス パリ

……まさか、こんな所に通されますか…

一夏は周りを見渡しながら心中で呟く

青々と生い茂った芝生達。庭先に立つ銅像は かの自由の女神像の原型となつたと言われる代物であり

ソレらを見渡せる位置に立つ建物の一室にて向かい合つた

「御呼び立てしてすまないね。一夏・織斑君」

一夏の軽く、8倍はかけ離れていそうな容貌でありながらこ

明朗快活な口調。ハキハキとした声音は未だ中年を思わせる活力に満たされており

「滅相もありやせん。あたし私みたいな手合いに御声をかけてもらえて至極、感激しておりますねえ…」

恐縮した姿勢のままに、目前でゆつたりとした一人掛けのソファに座る老人へと帰す

慇懃に腰を折つて礼を尽くす。目の前の老人は一夏の態度に満足なのか？朗らかに笑うのみ

……なぜ、このようになつてゐるかと言えば……

フランス領へと辿り着き、現地のI.S委員会直属のビルへと赴いた折に政府経由で一夏招聘の要請があり

政治的利害が発生したのである。すんなりと一夏の招聘に応じた委員会のままで

「さあ、立つたまゝのもソラライである。そちらへと掛けなさい」

老人はそう言つて対面のソファへと一夏へと指す

「…失礼いたしやす」

一礼してから進められるままに席に着く

「自己紹介がまだだつたね。私はジャック。古い耄れジャックとでも名乗らしてもらいましょうか

愉快そうに告げる。老人、ジャック

試しているのですかいな……？しかし、齢15程度の小僧に一流の礼儀を求めるというのも些つか…

思考するも、取り立てて礼を失する真似は犯しておらず

さりとて… 口調を咎めるなら、最初に旅立つ前に通達が来るはず。この口調は大概の者達に対しても使っているが故に

年が離れた物に対するは険悪されているのは一夏も百も承知であり

「へえ……ジャック老と御呼びすればいいですかい？」

対面する老人が揶揄するような言葉を紡がないと言つのなら、最初の口調どおりに返すのみ

老人の自然な態度に恐縮しつづけるといつのも相手を不快にさせる面もある

ソレと判断して一夏はそのままに紡ぐ

「ああ。それでいいよ…私は一夏君と呼ばせてもらひおうかな？」

「へえ。お好きに御呼び下せいやせ」

「では…一夏君。キミにね…折り入った願いがあるんだよ」

老人の破顔した笑顔を認識した瞬間

「いや……メンドクサイ」とこき込まれましたかね……？

アリーナ

フランス。工業界においては取り立てて…曰新しい代物が挙める
国ではないものの

世界シェア第三位に位置するほど工業力は

高速切り替え（ラピッド・スイッチ）…ですかい

現在の量産型工場の基本。第一世代型のラファールを世に多く放出
しており

眼前にて、数多の銃器兵装を量子化解除と量子化を同時にこなしな
がら

途切れる事の無い銃弾を浴びてくる機体

第一世代型専用改良機

ラファール・リヴァイブ？

基本装備の一部を外した上で後付け装備用に拡張領域を原型機の2倍にまで追加しており、その搭載量は追加装備だけで20体

アサルトカノン“ガルム”、連装ショットガン“レイン・オブ・サタディ”、近接ブレード“ブレッド・スライサー”、重機関銃“デザート・フォックス”

等など…歩く武器格納庫としての機能を極めた一品

そのオレンジを主体にしたカラーリングを巧みに操るは
対外的には…世界で一番田に発見された男性I.S操者。シャルル・デュノア

しかし…

相対するその男の姿。どうにも霸気が無く、何処かしらに迷いが生じているのだろうか？

魅せる技の技量からしても…

「…最近…見つかったと言つ話ですがね…」

どう見繕つても　　最近、現れた者ではありえない習熟度

高速切り替え（ラピッド・スイッチ）等、相当の訓練と搭乗時間を必要であり…絶対的に

時間が足りやせんね。あたし私が見つかった時等…真っ先に公表したという

思案する。己^{おの}が状況を考えて

当初、一夏の存在が見つかった折ですら…… 声高に日本国籍。元々が日本人で在る故に、日本政府が自国民として当然の如くに世話するのが当然

だが……事はエラとう。世界の軍事を根底から覆した代物。只でさえ……開発者が極東の島国の出であり

更には、世界初の男性IJS操者などと……禁断の果実の存在までも認める訳にはいかない世界各国

特に 世界有数の先進国達は

白人主義^{ぜつたいけんりょく}を豪語する輩を見れば……可笑しすぎるでしょうに

故に 極東の黄色猿^{イエローモンキー}と揶揄されながらも、無国籍といつ意味不明な国籍が生まれたのであり

私^{あたし}という存在を搔き消す為に、祭り上げたといふことであつてゐるんでしょうが……

見据えるは眼下にてホバリング走行にて、アリーナを駆けずり回りながらに

手の中の銃器を色とりどりに変えながら

アリーナの観客席ほどの中空を踊り続ける一夏へと弾雨を浴びせ続けるシャルル・デュノア

委細合切の言葉を紡ぐことなく、ただ淡々と標的たる一夏へと、感
い、葛藤を織り交ぜた視線のままに

どつこも…… いけ好かないですね

常の人を食つた余裕の笑みを浮かべることなく

仏頂面を晒す。雪車町一蔵のままであれば…… それこそ、内心で留
めて処理する感情を

織斑一夏としてうけた二度目の生で構成してきている人格が、未だ
… 成人に満たない青臭い餓鬼のままに

力力…。どつも、本当に私は丸くなつちまいましたね…
あたし

胸中と頬の筋肉の無意識の動きに、溜息混じりに思いつつ

が、半端者相手にするのは… また、違つものとして

スッと瞳が細くなる

かつてを生きた時代の中… 一度見据えた男の最初の面持ち

嫌で、嫌で、仕方が無いといつ

悪鬼の面持ちに似た嫌悪感

国が指示してゐつてのも… 少し廻り^{めぐ}りやしゃ… 是非もありやし
ませんが

飛来する銃弾の数々

フルメタルジャケット、アーマーピアシング、フランジブル

様々な弾丸が轟めき合ひつよつに襲い掛かる中を

さて……問いますかね

悠然と空を泳ぎながら一夏は脣を歪めた

シャルル・デュノア（後書き）

雪車町さんを知らないと最後の嫌悪感がやけにぱりな点

シャルロット・デュノア

アリーナ

相対する鋼鉄の武者

「けへ……存外に器用なお人で……」

人を食つたような笑みを浮かべて

彼　　いや、彼女。シャルル・デュノアが思つは……

これが……世界唯一のHS操者の実力……！――

刀型近接ブレード一本だけで、数多の弾雨を軽く越えてくる姿に
愛人の子として生まれたシャルルは内心で焦りに似た感情を抱えて

その、渋い表情を見せる端正な顔を歪める

実の母と死別し……身寄りのなかつたシャルルを引き取つたのは
シャルルが生まれてから母が存命中に一度も会いに来てくれなかつた

父。父と言つ記号を持つ遺伝子提供者の男

実しやかな愛は無かつたのであらう。母にも、そして行動からして

シャルルにも

身寄りが無く、そのまま孤児院に世話になるはずであつた物の……
その身に流れる血筋が

男にシャルルを仕方なしに引き取らせることになつたのであらう

幾ら、片田舎に押し込めたといふで……噂に耳口は立てられない

押しやつた片田舎でもその話は伝わっており　世界有数企業の一画を連ねるデュノア社の社長が

本妻に子も生まさず、愛妾に生ませたとあれば、世間の陰険と矛先が向かうのは必定

故に炎となる前に火種シャルルを回収して　自社のE.Sテストパイロットに押し込めた

この至近距離でフランジブル弾を回避するつて……！

右。やや上方、シャルルからの角度にしてみれば60度といった場所から近接してこようとした一夏を

その装備の都合上……シャルルの近く中距離の射撃戦闘対一夏の超近距離剣戟戦闘では

懷に入られたら……終わっちゃうよ……！

申し訳程度に積まれたスライサー程度で……どう足搔いても、天と地程の実力差を持つ一夏の斬戦など……持つて一合か二合

故に、兆弾性能を凝らした屋内戦闘向けの弾丸。フランジブル弾を積んだ

連装ショットガン“レイン・オブ・サタデイ”

その一つの歯を降りせる口六を我武者羅にばり撒くしかなく

「あら……中々無茶をされるものでっ。」

兆弾性能を殺いでいるからといって……散弾銃をぶつ放していくのに変わりなく

「無茶しなきや……キリの間合にに入つやつからね……。」

苦し紛れに放った牽制で一夏は瞬間加速を活用して間合にを遠のけるも……

シャルルの言葉の色合いの中に、未だ苦渋が滲み続ける。綱渡りな戦いなのが否が応でも

これじゃ……灰色の鱗殻なんて、ただの杭打ち機だよ……！

肌で感じる

「……それにしたって…さつきの攻防…」

すかさず、中距離へと詰め寄り…一丁のアサルトライフルで押さえ込むよつこ

ホバリング走行を開始したシャルルが語尾を荒げながらに紡ぎだす

「押し切れば、ソッチの勝ちだった！！！手加減のつもり？！」

被弾覚悟ならば、確実にそうなっていた。そうなっているはずだ

シャルの言葉に一夏は、口元を歪め……目尻を下げながらに

「へ、へ、へ……いや、なにね」

一夏が言葉を紡ぐ間もシャルルは押さえ込もうと中距離をサイドステップ感覚に機体を揺らして、間合いをとる

対する一夏は、付かず離れず。シャルルが放つ銃弾と戯れるように踊る

「確かめたかつたんで…」

声音は冷え切っていた。紡がれた声音は完璧に

「何を？！？！」

「けえつええつえええケけけつけ！ひえええつえええへへへへへへ

！…！」

「ツー！嫌な、晒いだね！…！」

盛大な奇声が響く。一夏とシャルの間に、絶え間なく響き渡る銃声によつて二人の間にしか分からず

その笑いに気分を害したシャルが表情を歪めて、さりにアサルトライフルにかける人差し指に力を込める

一夏のその態度に対する怒りと 積み重なってきた怒りへと

「たいした……人形様ぶりで……」

侮蔑が籠つた言葉は……シャルに響かず。自身の口の中だけで発される

そうするつもりが

「キリ!!?…?!知ってる?…!くつ……！僕だつて、僕だつて……！」

「…」

発された言葉の額面上のままに受けとったシャル

表情が驚きに占領され……次いで、瞼の端に小さな水滴が一瞬だけが浮かび上がる

「キリ!!?……何が分かるんだ!!?!!」

「いやいや……見た格好そのまま。と、しか解釈できませんねえ……」

「…」

「バカにしてるの?!!」

「こやせや……なんとも」

「バカにしてるでしょ……!!」

「「いつせ……また……私が苛めつ子つて駅ですか」？」

「ナリハでしょ……」

シャルが激化し、一夏と喧に争いになつてこるまか…両機のエリは立ち位置を変え、滑るよつに舞い続ける

怒りが…き出しになつていく。蓄えられた…理不具と流されるしかない生き様故に…蓄えられた怒りが

咆哮となつて一夏へと牙をくへ

往々に、猛だけしく、凄まじく

その、少女の怒りを、無情の怒りを

「くっくっく…く、くくく…やつぱ、餓鬼だ…！覚悟が足りねえ…！…意…思…が…足…り…ね…え…！」

侮蔑、嘲笑、愚弄の叫びが木靈して返す

「何が…！何が足りないって言つんだ…！…！」

自身の怒りの感情に囚われ、一夏の紡ぐ言葉の魔力に囚われ

？き出しの感情と想いのままに吠えて問い合わせる

「こやあ…なに、お嬢ちゃんがね、くつだらない半端者だつて事で

すよ

またも…シャルルは額面通りに受け取る

半端者。ソレが指す言葉が、女でありながら……男の格好をしていることを指摘していると思つて

さらに激化して、言葉を荒げて紡ぐとするも

「嫌なだらうお？男の格好をするのが…」

淡々とした聲音でありながら…怒氣が籠つた言葉を封じ込めて紡ぐ

「嫌で、嫌で、たまんないんだらう…」

それにシャルルは答える

「そりだよ…！嫌だよ…！」んなの！僕だって…僕だって、女の子だ…！」

搾り出すように告げる

「父さんに引き取られて…！ISの訓練をさせられて、男として教育されて…！嫌じゃないわけ無いじゃないか…！」

「なら…なんで、逃げなかつた（・・・・・）？」

その一夏の言葉に体を一瞬をビクつかせた…シャルル。ソレを見逃す一夏ではなく

「お嬢ちゃん。世間の柵しからみがあつが……逃げ出す方法は幾らでもありますから、どうぞ」

知つてゐるからだ一夏は

I.Sの操者うしやうしゃが一夏を除き、全てが女性のみ。されど軍事業界といつものが未だ男達の世界である故に

薬物、拷問、拉致、調教、洗脳。ありとあらゆる手段を講じてI.S適正を持つ女性を無理矢理支配下に置く時代があつたのを

何時の時代も女は男の道具。といつ愚劣を極めた考え方を持つ男は居る。だからこそ

江戸時代の日本にあつた縁切り寺曰く。各国に設置されたI.S委員会の敷地内に血口意思で逃げ込んだI.S適正者は

問答無用でI.S委員会の保護下に置かれると言つ事を、アラスカ条約に異例的に盛り込まれた法案を

「ソレを行わず、さりとて……嫌だ、嫌だと……呟えるのみ。けけれ嬢ちゃん。あんたはな」

口元が酷く歪む。雪車町一藏のよつて、下卑た笑みが込み上げる

心底、嫌いな

「どつちでもねえ。男として生きると覺悟することもなく、逃げる意思も持たねえ。どつちつかずの半端野郎……」

罵声の如くに轟かせる。伏いてしまつたシャルの肩が小刻みに揺れる

「黙れ……」

まるで…泣いてこらかのよひに

「くつだらねええつええつええ！――ひやひやひやひやひやひあ！」

1

まるで…怒りを溜め込むように

「黙れよーお前えええ！――――――」

思い起します。昔の記憶

幼き日々、父が居らずとも……幸せそうにシャルルと共に生きた母の姿

時折……写真の中の父へと吐息を洩らす母の姿

なんにも知らないくせに！－なんにも僕の事知らないくせに

! !

「あ、へへ……半端者が半端者呼ばわりをされると一歩前に腹を立てるらしい……」

激情が全てを動かす。不意に飛び上がる

アリーナの席位置の中空にて舞つ一夏へと銃弾の雨を降らす為に
一夏が陣取るより上へと瞬間加速を無意識に発動させて

態勢を取る。全射撃兵装を展開する

その姿 まさしく、歩く武器庫

構える。ターゲットスコープに一夏を捉える……引き金が絞られる

フルメタルジャケット、アーマーピアシング、フランジブル

弾丸の雨達が重力と加速に導かれて 一夏の元へと直走る

中

構えた太刀を這わせる

アリーナに籠る風の軌道に

風の呼吸に

ラウラ・ボーデウィッヒに放った剣技^{アーツ}とは違つも

かつて…雪車町一蔵が生きた世界の日本。大和において最も名が栄えた流派。一刀流

その最極意の一つ、一刀流五箇条の内の一つがある

王劍^{ンターン}

金翅鳥^{インメル・マ}

ソレと共に伝わった残りの四つ。妙劍・絶妙劍・真劍 そして

「ひやあ、ひいや、ヒヤアアツアアアアツア――――――！」

バレル・ロール・エッジ
独妙劍

インメル・マシターン
金翅鳥王劍^{インメル・マ}が失速領域内での

上昇速度が無になる刹那の、落下重力の発生を掴み成し遂げる剣技^{アーツ}とは違ひ

方向翼^{バインダー}を切るのは同じ。ただし、太刀といつ名の方向翼

まるで、太刀がオールのように水を、海を搔き分けて切り進むかのように

空といつゝ蒼い大気の海を泳ぐヒレのよつ

太刀が振られる

ロール 横転と機首上げを同時にやつ。横倒しの樽の内壁をなでるよつに螺旋

旋を描きながら

跳ぶ……飛ぶ

迫り来る。一夏

銃弾の雨を悠々と大海を進む鮫のよつて、血ひの元へとせりつてくる
刹那の中

びうしたい？ 嬢ちゃんは… びうしたいんだ？

決して、雪車町一藏のままであれば絶対に紡がない言葉を紡ぎだす

びうして、嫌嫌やつてる？

絶対に紡がない言葉を紡ぎだす

嫌だ、嫌だつて体が言つてゐる

コア・ネットワークを介して

本当はこんなこと、したくないつて本音が透けて見える。嫌
ならやらなきやいいだろつが？

シャルルのみに伝わる言葉で

嬢ちゃんが、そうしなければ…会社が潰れちまうつてんですかい？

コア・ネットワーク。シャルルの?き出しの傷ついた心が曝け出される空間で

嬢ちゃんにしか救えない。でも、嬢ちゃんは男装レディをしたくない。ってなんなら

心が跳ね上がる

見捨てちまえ。そんなんもん

傷が跳ねる

どつちだつていいんだ。見捨てようが救うおつが。よつは…

跳ねる

嬢ちゃんがしたいのか、したくないのか?ソレだけだ。納得してたら

泣いて怒りやしねえ。納得してねえから……ああ、なつちまつ

人間、みんな。自分のことしか分からねえ、分からねえから、自分のやりたい事を

てめえで考えて、てめえで納得して、やる

みんなそいつって、真面目に生きていらあ

お陰で世の中、面白れえ……。だから、^{あたし}私の好きな人たちが見れる

くすんだシャルルの心が見惚れる

付き合つてみても、ぶつかつてみても……みんな生きぬ」と
に半端つてもんがねえからいい

泥臭い、少年のような笑み

どいつも、どいつも……楽しい奴らだ

心底、其処に生きる者達が好き好きでたまらないという表情

HISといつ……女性達が切磋琢磨し続ける場所で生きているからこそ

嬢ちゃん。てめえだけだ

織斑チンピラ一夏なのだ

どうしたい? どうなりたい?

ポツリと言葉が洩れた

自然と、手にした銃と瞼の雫を力なく零しながら

迫り来る一夏へと、弱弱しく手を差し出して

「たすけて……一夏…」

シャルロット・テュノアは真っ赤にした手で告げる

最早、雪車町チシヅラ一歳ではない

「最初つから、そう言やいいんだ」

笑みが滴る。もがき苦しみながらも、前へと一生懸命に進みだした
女の子を

もう一度、記さう

織班チシヅラ一夏なのだ

鳳鈴音 上

輸送機内

ハンガー ロック内にて怒声が響く

「いーちゃん！……」

訂正。怒声みたいな童顔の大人の女性の大声

「そう……カツカしてやすと小皺が増えますぜ？カルシウムでもお取りになります」

装着したIS。第二世代型量産機“打鉄”の具合を確かめるように

ハイパー センサーが統括する機体、データへと視線を流しながらに一
夏は告げ

「ふざけないで……丸一つ！管制塔をお陀仏にしたつてのに……」

管制塔

シャルロットとの評価試験最中における……シャルロットの助けに
求めて

「まだ、言いますかい……」

後頭部を掻きながらに嘆息しつつ肩を落として

「あつや、iji、アレですわ。由業由得……みたいな？」

「由業由得もへつたくれもあつません……あんな」

大きく息を吸いつ

その影響で自前の最大の特徴たる大きな胸が

よつ一層と協調されるよつに高くなつていき

「突つ込んだら壊れるに決まつてゐじやないですか……」相手に
コンクリートなんて紙切れ同然なんですよ?」

一気に吐き出す

一息で言葉を紡ぎきり方を激しく上下する真耶

対する一夏は最初から真耶の行動を分かつており、言葉が発される
直前で耳栓をしてシャットアウト

「建物が壊れただけで済んだんですから……御の字でしょう?」

掌を広げ、肩を竦めておどけた態度で言いながらも

「奴さんりにとつては」

瞳は一度も笑つとはい

「マーカ嬢ちゃんも知つてゐるでしょ?」

当たり前だ。織斑一夏は雪車町一蔵でもあるのだから

「一生懸命生きてる奴に……半端を強いる奴は」

いつ返すに決まつてこり

「大嫌いだと」

「……ちやん……」

一夏の言葉に真耶は肩を抱いて、切なしつゝ言葉を洩らす

「あたし私や……別に構いやしませんよ、あたし私自身がどうなひつとなね……」

人を食つたような表情で紡ぐ

「世間様に歯向かつた所で、真つ先におつ死ぬのは眼ちに見えており
ませ……」

あつけらかんとした聲音で紡ぐ

「それに、そう悪かない生活ですぜ? なにせ……一番、おつかない
位置に立つていやすからね? おかげで」

一タリと口元が歪む

「面白いモノがアツチからおいでなさる。存外、悪くない生活だ」

「こーちゃん……」

真耶の表情が歪むのを見て取りながらに

「そりや、最初は気に食わないでしたぜ？なんせ、こいつどう…静かに暮らしてたつてのに」

思い起こす。この新たな生を受けてからの記憶

対面に座す……己に齎えきつた木刀を構えた胴衣を着た男

ソレが立つ側にて座つている“最初”の幼馴染と

自身が立つ側にて、制服姿で立ち尽くす織斑千冬の姿

“天災”との出会い。騒動へと巻き込まれる自身

——との会合。息つく間もなく戦いへ

ほんの微かな出来事しか思い出していないのに…

「次から次へと厄介事が押し寄せできやがりますからね……」

疲れたとこりうで溜息を吐くよろこび肩の力を抜く

「いー……」

「ですがね。マーヤ嬢ちゃん」

真耶が潤んだ眼で一夏へと言葉を紡いづつとするも

一夏は真耶の唇へと人差し指を立ててくつづけて塞ぐ

第一関節から第三関節までの指の腹が湿った唇の熱を伝えてくる

「存外、悪くないんですよ。本当に」

その熱の心地よさに身を委ねるよつて一夏は瞳を閉じて

歌うつよつて、元ひよつて告げる

そつしてハイパーセンサーで精査していた自機のバイタルチェック
が丁度完了し

「では、行つてきますわ……“天災”には貸し一つて伝えてくださいな」

「……直ぐに取り立てに来ると思つよ?」

「なに……どうせ、用件は分かつてやす。ソレが早くなるか、遅くなるかの違いだけですから^{あたし}私的には踏み倒しているのと同じですので」

クツクツと下卑た含み笑いを上げ

ハンガーの機密をロックする。真耶の唇へと当てていた人差し指を離し…其処に防弾性も持たされた強化ガラスが一人を隔てて

機外へと落ちていく。自由落下の行き先は

「いーちゃんのバカ……」

腰が砕け、床へと尻餅着いた真耶は…人差し指と中指の一本で唇を押さえて呟く

潤んだ瞳のままに

後日、デュノア社への襲撃事件を報じる記事が紙面を占めるも…

大蓮　IS訓練所

「つて…この話、あたし私が主役じゃないの？！」

のつけからメタ発言をかますは…中国代表候補生にして

一夏の一人目の幼馴染。幼さを醸し出すツインテールは縁のリボンで纏められ

小さな背丈はさながら、更に強調するも……その烈火のよつた性格から

「ううう……もう一ひとせ、コレ……夏が無茶したんでしよう……！」

優雅にランチタイムと洒落込んでいた事実など……吹き飛ばして

唾を盛大に飛ばしながら剥れる。鳳鈴音

手にしていた新聞紙をテーブルの上へと叩きつけながら

デュノア社襲撃事件の記事を突く。親の敵のように、其処に映るビルを睨みながら

「世界三位のシェアを誇るデュノアが……襲撃者を放置なんてするもんですか……！」

巡る思考。巨大企業といつても差し障りの内程の規模を誇るデュノア社が

社の名前に汚名を被つていても関わらず……犯人の特定ができるといないと発表するからには

権力が動いたに違いないと、ソレも……桁違いの権力が動いたということを推測できるぐらいには

「どうこうとか……きつちり説明してもうつからね……！ 夏……！」

ダイニングから見える寝室のベッド。その物置き場に置かれた

二人だけで撮った。一夏と鈴だけが映る写真立てへとガンを飛ばす
鈴であつた。

が

不意にアラームが鳴る。その音に肩を一度大きくビクつかせて鈴は油の切れたブリキのおもちゃのような仕草で首を

音の発生源へと向ける。鈴に似合つている緋色の携帯……鈴が恋焦がれる者からの初めてのプレゼント

「うがあああつあ！..！」

乙女として、コレせじかだとこう譽を顔を上げて

髪をわやくしやにしながら吠え、寝室の鏡台へと飛び込む鈴

何時だって、女の子の支度というモノは時間が掛かるものだから……

輸送機のタラップから直接下りて、空港内に入る事もせず、一夏は燐々と降り注ぐ太陽の中

此処に…来るのも三回目ですかい

そんなことを思つゝ、顔を見上げる。田舎し避けに手を額に翳しながら、

少し、離れたところで真耶が担当面となにせん打ち合わせてくるのを見やりながら、一夏は

しつかし……毎度、思いますがね

視線を周りへと移していく

珍獸じや…ありやせんのだがね

ISHという代物性質上、どうしても現場も技術者も女性が上位となり、必然的に職場内の人員もそれを反映して

女性ばかりになりやすいのは押してしかるべき。なのだが…

男田照りつて奴もあるでしょうがね

最近、とみに溜息を吐くのが田課となつてこむと直覚してこむもの

こんな、チンピラ相手に触手が動くよつじやあ……世も末といふ奴でさあな…

思わず、糸目になつて得体も無い事を思う

視線を向けた先に屯する。色取り取りの女性達

一夏と視線が合つたという勘違いを起して、真っ赤になつて伏せて
しまう者

調子に乗つて手を振る者

彼女達が居る場所へと手招きする者

10代、20代。背が高い、低い。細い子、太めの子

本当に選り取り見取りな女性陣達が一心に一夏へと視線を送る中

「いーちゃん。搬入が開始されたから戻つていいよ?」

真耶がそんな女性陣を封殺するように、一夏へとやつて来て視界を
塞ぐ。無意識的に

我が弱く奥手の彼女であるが……ソレでも大人の女性であり、恋す
る乙女であるが故に

「いや、あたし 私や待つてる人が居ますからね……此処に居ますわ」

そんな真耶の想いとは裏腹に一夏は陽気に答える

「…………ち…………かああつああつあ…………」

遠くから怨念の呻きのよひな叫びが近づいて来るのを

「く、く……来やしたかね？」

「コノヤ鈴音の嬢ちやん」

少し、瞳が緩んでいた

鳳銓音 上(後書き)

最後のルビは誤字にあります

大蓮

「あによ……ジロジロ見て……！」

上目遣いに見ながらに、その小柄な体には不釣合いな程に大きな丼を抱えた鈴

その瞳はジトツとした三白眼のままに睨む姿を見やりながらに

自身の前に置かれた丼。二人ともに坦々麵が満たされたソレへと視線を戻しつつ

「…ひき肉が口元についてやすぜ？」

人差し指は鈴の頬へと伸びて、指摘した茶色の物体を拾い上げて口に含む

「ううううさいわよ？！ボケえええ！－！」

一夏に指摘された瞬間にヤカンのようにな湯気を一気に噴出しながらに

赤面したまま怒鳴り散らすように文句を言つ鈴

抱えた丼の汁を飲む形で…真っ赤になつた顔を隠す

「あ～あ～……わうがついたら

鈴のその様子に一夏がめんべくわいわい声を上げて

「げつほ?—げつほ?—」

「ほり、言わんじつちやない……大丈夫ですかい?リンネの嬢ちゃん

ん」

背中を擦ってやりながらに一夏はカウンターに置かれたティッシュを拝借して鈴の口元を拭つてやる

さて、場所はもう分かるだろ?が…食堂の一角。カウンター席に一人並んで食事を取るは

世界唯一の男性IDS操者。織斑一夏

中国代表候補生。鳳鈴音

小学校低学年からの付き合い。俗に吉つ幼稚染といふ

「つて…また、アンタは…私の名前は鳳…ファン—鈴音リンイーン—」

差し出された自身の口元を拭つ手を払いのけることもせずに

逆に成すがままに受け入れて……うとうとうとこの擬音が付きた
うなほどに許していた鈴であるが…

「コンネなんて名前じゃなにっての…」

一夏の最後の呼び方にツインテールを逆立たせて、肩を怒らせながらに吠える

「いいじゃないですかい？軽く……5、6年以上はソレで通しているんですね？」

「アンタがそんなんだから！私が名前間違つて覚えたからどうが？！」

「いや、お国読みで通じないと思つて聞いてきて」

クツクツと笑いを耐えながら

「バカ正直にソレを信じちまつ。鈴音玲音の嬢ちゃんの可愛さに負けちまいやして……」

今にも噴出しそうな一夏とは対称的に

「きいいいい……ムカツクうううう……しかも、変な時に可愛いなんか使うから……余計にムカつく……」

地団駄を踏む鈴は更に眼光を鋭くして

「それに…いい加減に嬢ちゃんはやめなさい…。」

ビシッと人差し指を指して

「アンタと私は同じ年でしょうが…嬢ちゃんなんて呼び方は嫌なのよー。」

「と、聞こましても……『レッスンの性分なんですがね……？』

「性分もヘタくれもないわよーだつたら……」

「だつたら?」

「鈴音リンネつて浮ハラぶか、嬢ちゃんつて浮ハラぶか……がつちか一つに絞スルつなさい。でなきや……」

腕を組み、瞳を密して光らせ齧すみづて浮ハラぶる鈴に對して
変な一択になつやしてからい……

ちゅつと、ある意味で心配になりかける一夏であったが

「へえへえ……でしたら、鈴音リンネと。浮ハラませていただきやすかね

一夏の嘆息交じつの返事に鈴は首を大いに頷かせて

……意味、あるんですかね?」の選択は…

満足そうにして二年中、一夏はそんなことを思つも

「ああ、いいわ。ほら、その……よ、浮ハラさせてみなさこよー。」

田前で真っ赤になつながら口を開いて、浮ハラふ」とを確信する鈴に對して

「……鈴音リンネ」

後頭部を掻きながら

「…もつかい」

「鈴音」

「……もつ一回」

「コノネ鈴音…」

「……最後」

瞳が潤みだしてきた鈴へと凸ピンをプレゼントしながら

「カカカ、しつこですぜ?」

「こつたあああ……あにすんのよーー!」

席を立ち、鈴へと踵を返して食器を返却カウンターへ

「存外、気に入ってるじゃありませんか?」

「?!?!し、仕方ないじゃない!あ、アンタが呼びたい方に会わせてあげてるんだから!」

「合わせて……ねえ」

「何よ?!.その胡散臭そうな田線は?!.なに?文句あんの?..」

「そんな、必死に言わんでもいいでしょ?..」

最後はもう腹がイタいと言わんばかりに

鈴の必死な姿に腹を抱えて笑いを我慢する一夏

「うわ…うわ わいーうわ わいーええ、そうよー悪い?ーアンタが付
けてくれた」

「^{あたし}私の特別な名前だものー!ー」

ツインテールを振りまいて、逆切れ氣味に盛大に言い返す

「ふつ……クク。カアツカカカ!ー!ー

「わ、笑うなー?ー」

「ひ、ひひ……コイツは済みませんで……。しつかし、まあ……余程、
気に入つていただけたようで」

「絶対……アンタ、誤解してるわね……」

一夏の物言いからして、ジト目で見上げる形の鈴は嘆息交じりにそ
う呟くも

その言葉が一夏の耳へと届くことは無く

「しつかし……アンタのその笑い方、直らないわね~……」

嘆息しつつ一夏の笑い方に苦言を申す

「これも、性分ですか」

「性分ね～…」

まあ……このままの方がいいかな?

鈴もまた返却カウンターへと自身の丼を返し、手を後ろ腰で組みながらに

隣を歩く一夏を盗み見る

これ以上……変な虫に集られるのも

「?^{あた}私の顔に何か付いてますかね?」

「別にー、何にも無いわよ」

一夏の問いかけをおざなりに返しながらも

同僚達の視線を牽制せんと、睨みを利かせるようこへり付く鈴

「ですかい?」

「ですよね?」

そんな鈴を好きなようにさせる一夏

一々、突っ込んでも　　大概の場合、出会つてきた女性達の殆どが

一夏の意見など……話半分程度にしか聞き入れてくれない故に

最早、口出しあるのも億劫となつてきている始末

「アリスばばや、一夏」

「なんですかい？」

「いい加減、専用機は受領したの？」

「……ホンとに間が悪いですぜ……鈴音コソニキ」

額に手をやつして仰ぎ見る一夏に対しても

「さつへどりゅうひ」とよへ..」

唇半開きにして間の抜けた表情で問い合わせる

よつも、先に答えがやつてきた…

「こーちゃん〜〜！篠ノ之博士から届きましたよ〜〜」

通路の先から、真耶が一夏へと手を振りながらにかけて来る

今にも

「へふつ〜〜」

訂正。今し方……何も躓く物がない場所で「ヶながらに

「あーあー、マーヤ嬢ちゃん…」

「わ、ヤるわね……！」

「ケで涙田にならながらも顔を上げる真耶へと

一夏は手を差し伸べて起き上がらせ

鈴はそんな天然な真耶へと驚愕。何せ、起き上がらせよつとする一
夏の手を

その、鈴からしてみれば…親の敵とでも形容できそうなほどの胸を

鈴の視点 悪意120%満ちた視線の中では強調しながらに助け起される真耶

「あ、ありがと。いー……ひうっ！」

「?…って、何睨んでるんですか?」

「?…あ、気のせこよー。」

「へえ…。で、マーヤ嬢ちゃん…アレが届いたと?」

「うん。もつ、輸送機内ハンガーには掛けてるけど…」

「ですか。ありや…腐つても アレですしね…」

「あはは…」

一夏がウンザリ気に洩らした言葉に苦笑しながらに頷く真耶
何せ……耳にタコが出来るぐらうに言い聞かされたのだから

輸送されて来た機体が　　白騎士のコアを積んだ3・5世代機
日本が開発していた第三世代の欠陥機を束が貰い受けて、強化改造
を施したIS

基本構造は現行最新鋭機である第三世代と同じ技術を使われているが
搭載武装は

「武装も……一緒にですかね？」

「うん……」

真耶の頷きに深い深い溜息を吐く

「……メシヤージは一緒で？」

「何にも付いて無かつたよ？」

「なら、放置で」

面倒事は厄介払いに限るという態度

手で何かを払う仕草で一夏は反射的に言い切る

「えつ……と……？」「いの？」「ーちゃん？」

「いいも、何も……あたし貸し一いつと言つただけであつて……」

指を一つ立て

「受領しますとだけ言つただけでして……」

「それ、屁理屈だよ……」「ーちゃん」

「つていうか。私あたしを蚊帳の外にしないでよ」

ジト田が一つ。一夏へと刺される

「なによ？一夏。アンタが受領した機体つて、そんなに問題児なわけ？」

「……機体そのものに難があるわけではな……くはないですか……」

ツインテールに手を差し入れながらに聞く鈴

それに答えようとすると……途中で言葉を変更することになり

「そんなんにヤバいわけ？」

「ヤバイも何も……つと、いいですかい？」

「……いーちゃんの立場が作用して、特に守秘義務とかはないですね。逆に、装備の稼動データを提出する側ですし」

「男冥利に尽かるといつ事で」

世界唯一の男性H.I.J操者といつ事は、つまりは一夏でしか取れないといつ事だ

男性の機動データ、兵装稼動データ、その他諸々は

IJS業界では唯一のXY染色体といつ生物にカナガローされる一夏に必ず付き纏う事項であり

逃れられない定めでもある。ある意味で

「いいじゃない？お陰でアンタは各国の最新鋭装備をタダで貰えるんだから」

「……世の中、タダほど恩いものはありやせんぜ？」

タダとは、つまり…恩を売つたといつ事

何時、何処で、回収されるか分からぬ代金を払えるほど

大きくはない一夏は

「何よー！中国の殲撃を使わないつての？！」

「……リンネ鈴音の所の機体は大陸刀か偃月刀の運用ベースといつのもありますからね…」

「打鉄の刀型ブレードと大して変わらないじゃない…一つのブレード！」

「……完全、トップヘビー型でしょうか。ソレに……太刀を振るう設計思想ではないと」

肩を竦めて、嘆息を吐き出して一息入れ

「まあ……打鉄の兵装にしても、無いから使つてるってだけですけどね……設計思想は日本刀を一応前提に考えてますから」

刀型ブレードなど、所詮は日本刀を真似た刃物でしかない
いいとこ太刀と形容できるが……反りも浅く、造りも弱く、惰弱その
もの

刀鍛冶たけいはしかり、研師じゅぎし、鞘師さやし、白銀師しろぎんし、柄巻師つちまきし、塗師ぬりし、蒔繪師まきゑし、金工師きんこうし

誰が見ても……刀と呼びたくないと言つほどのモノ

「太刀サイズも気に食わないですしね……あたし 私や打刀が一番、性に合つてまして」

「じゃあ、別にいいじゃない。設計思想が気に食わないなら、手を入れればいいし……」

なおも食い下がる鈴へと再度、肩を竦めて

「それでも私的にはいいんですけどね。お生憎様といつやつで、篠ノ之博士直々の」

「御用達しでもあるんですね」

一夏の言葉を引き継いで真耶が告げる

ソレを気に食わなさそうに舌を尖らせる

「…そう言えば、アンタ知り合ひって言つてたわね？たしか…私が
引っ越してくる前に居た幼馴染の」

「もう、天災の姉さんって訳でして……お陰で今でも勘織ってしま
いますわ。私の今の立場に」

「……まつ、そつ思ひやうね。で、結局今回送られてきた奴も気に
食わないって？」

「はあ、まあ…。ええ、そつですわ 誰が好き好んで」

け、けつへえ…という笑い声と共に

「相手を斬りながら、自分も斬るかつてんですかい。私やマゾじや
あつやせん」

「…どうじよー?..」

「ええっと……ワンオフアビリティーズ 盾殺しなんですけどね。单一能力で

「はあ？！最初から单一能力持ちですか？！？」

ありえないという表情のままに真耶の言葉を遮りて叫ぶ

「せ、先生に言われても……」

鈴の血相を変えた表情に怯える真耶。荷が重いと判断したのか

「ソレは横に置いといでですな」

「置いとけるか！――バカ！」

「横に置いて」

鈴のツインテール両方へと手を差し入れ、其処から頭をホールドする

「ちょつ？――近つ？――」

至近距離から瞳を覗かれる形となつた鈴は

耳まで真っ赤にしながらも、一夏の瞳から逸らすことができなくなり

「鈴音^{リンネ}。使いたと思いやすか？……命削りの武器なんぞ」

「…………無いわね。ってことは……シールド削りながらシールド削る
と?」

その死んだような瞳に冷や汗垂らして、呆れたような口調で鈴が返すと大いに頷く一夏

「……アンタもつづづ

」

鈴が言葉を紡ごうとした時、一夏、鈴、真耶の三人が持つエスに通信文が同時に届く

「つと、時間ね

「では、後ほど……で

「ええー見てなさいよ……」

二人はお互いのエラハンガーへと踵を帰して

「今日こそ……アンタに勝つてやるんだからーー！」

腕を組んで踏ん反り返りながらに鈴は鼻息荒く、宣言したのであつた

「敵機。一回度よりいやや後方トより接近。方向反転の意図を求む」

金打声
メタルエコー

やや甲高い女のもの

「不要で。私や…逃げの一^{あた}点に賭けてるだけですしね」

「ボリと音が鳴る。紅い命を零す音が

翼^{ホロ}甲^{ホロ}が切り裂き、甲高く啼く。風

その鼓膜を撃ち震わせる音がヤケに小さく感じじるへりこに、紅い命の液体が吹き零れる音が鼓膜を打つ

「仕手並びに自機状況。仕手の熱量の減退が著しく、時の逸脱は此^{なた}方の性能が發揮できぬ様を伸ばすのみ」

淡々とした金切り音はどんな感情も発さない
メタルエコー

ただ、現状と推移される事態だけを

「仕手の滅は逃げ手を打つ限り、覆らず」

伝えるのみ

「ひつ、ぐ。攻めて、じつじつと？」

「華を散らせる」

「力力。変わらないですぜ？それに、私はそんな役柄ではないので、
ごめんね」

言葉を紡ぐ間も、背筋に悪寒が走り続ける

一つの意味合いで

「つまらぬ。百四十度ほほ直下より。来る」

刻一刻と迫る。自滅のカウントダウント

血潮が枯渇して、錐揉み上げて墜落

刻一刻と迫る。白刃

一刀の元に切り伏せられ墜落

「袈裟上げ、切り伏せ、躍り」

メタルエコー
金打声は続ける

死を具現化した刃が自機へと降り注ぐ軌跡を

振るわれる以前から断言する

剣戟が一つ重なり、一つ鳴る

袈裟上げを迎撃する九十式打刀が火花を飛ばし、鱗が入りながらも受け止める

仕手が有する神懸り的な技能によつて

振り上げられた刃を巻くように払い上げる

重なり、一つ

続けて振られる切り伏せを巻いた刃で払いのける

重なり、二つ

も 其処までしか 打刀は持たず

元々、九十式竜騎兵の基本装備品。大量生産の刀

肩に抱く。長刀、太刀……“天下一名物”に引けを取らぬこの剣胄ツルギの主兵装と比べれば

いや、“天下一名物”より先に見つかっていれば、コレこそがそう呼ばれていたに違いない

何せ……この剣胄ツルギの待機形態は 蝙蝠フタコなのだから

そんな剣胄ツルギの主兵装と比べれば

ナマクラナマクラと言つのもおこがましい粗悪品

その長大な、同じように肩に抱く鞘の前面が開く機構を用いて帯刀する野太刀を

一度も塞き止められたのは 正しく、仕手の剣爛舞踏の賜物

しかし……剣爛舞踏は刀を用いて、初めて

「けペえ」

成しえる

剣戟が鳴る。逃げの一手を打つ剣冑

その紫紺の装甲を抉るように野太刀を躍らせて

BLADE ARTS?
けんげきがみつなる

最後の音は装甲を削る音と共に

「……？！」

微かに野太刀を構えた敵機が揺らぐのが気配で分かる

只の一撃が、最早どんな一撃であるかと一撃必殺へと成り果てた刃を持つてしても

逃げる剣冑のバランスが崩れている

その剣胃^{ツルギ}を纏う仕手の小さな呻き声も聞こえた

なれど 紅の蜘蛛^{スカーベック}にして“災厄の英雄”の手に返った手応えは軽い

「躍り命中。敵機の一撃により、此方の横腹鋼鉄^{こなたはだ}に傷。損傷による性能低下なし」

「けひ…流石は失われた剣胃^{ツルギ}ですかい」

一撃が装甲を抉ることなくも…仕手の命は抉つていく

野太刀が叩きいれた一撃の衝撃は容易に

「仕手。更なる熱量喪失^{カロリー}を確認。現状までに落ち込んだ熱量と身体状況から覆すは不可と断定」

溜息のような聲音で金打声^{メタルエコー}が響く

「此方は仕手とは巡り会えど、御堂とは巡り会えず」

悲しむことも、嘆くともない平坦な感情のままに響く

「ま、流石に…私も終わりですな。けえへつつへへ」

あたし

剣青^{ツルギ}が洩らした言葉に頷きながら、可笑しげに笑う

否、嗤う。視線を後方から追い縋る敵機へと向ける

リニアアクセル、グランティアクセル
電磁加速、重力加速を用いて追い縋る敵機へと

「けへ。いいですぜ……迷う事は最早、ありえないといつこですかい？」

問い合わせる。楽しそうに、愉しそうに、可笑しな嗤いを上げて問い合わせる

なれど、答えが返ってくることはない

最早、湊影明が迷う事はない。示されたは筈

「仕手。何が面白いと申す？仕手の心拍数は異常だ。死に瀕しても微動だにせんかったものを」

嗤い続ける仕手へと、問う。興味があるといつ感じに

「カアッカカ。いや、なに、ね……」

ホッとした顔で

「半端者に送られるのだけは勘弁でしてね」

瞳を閉じて告げる

「^{あたし}私や、確かに……あの時。背を向けやしたがね」

告げる言葉は劍胄^{ツルギ}の疑問に対してもう一度答えるよつなのもの

「どうも、警察の旦那が、ね?ずつと、腹決める様なんぞ」

「^{あたし}私にやあ……信じられなことでね?」

本能が感知したのかもしけない

何かが仕手を引っかからせたのかもしけない

“災厄の英雄”が返歌の先へと辿り着かない限り
　　湊影明が迷
う事はないと

「仕手。名は?」

「名?蜻蛉^{ハヤシメ}さんに答えられるような名は持つてやしませんよ……私の
　　^{あたし}名はチャンピリで」

「…………此方の感性は鈍ったのやもしけんな」

初めて、生の感情が乗せられた金打声^{メタルヒロー}

「じゃないですかい?だつて、ね?」

「最低と最高がソリが合つなんて……ありやしない」

呆れたよつた言葉は首と共に舞つた

大蓮 アリーナ

今度は剣戟が四つ鳴つた

よつつなつたのだ
BLADE ARTS?

「腕を…上げやしたね。鈴音」リンネ

「当たり前！！何時か、アンタと一緒に飛び回るのが私の目標だも
の！！」

織斑一夏が相対するは

ジャンジ
殲撃

中華人民共和国の第一世代量産IS

世界人口第一位を誇る国であり、必然的に

「専用機の受領はしているはずで？」

IS 操縦者の適正資格を持つ者が多く、量産機の数も多い

その中の一機を鈴は

「殲撃も私の専用機だつてのー。」

第二世代専用機の受領以前は殲撃の専用機を与えられており

現状

「それに……田籠はまだ、調整中よ……」

滑らせてきた一夏の太刀を鈴の偃月刀が流す

先端の刃が一夏の太刀の刃行く先を補正するレールのように

「浮遊砲台に難航していると…」
アンチ・ロック・ユニット

「ハハハ……アハ、シハーッンタは、モウ……モウ二つのせ銳こくせん

偃月刀を振り回す。近接する一夏が間合いを見図り

鈴の獲物の間合い微か前方へと打鉄を動かし揺らめく

遠心力を込めた一撃を一夏へと叩きつける

対する一夏は無難とは言ひがたいまでも

持ちえる太刀で持つて危なげなく逸らす事には成功したのだが

甲高い音がアリーナ内に響く

「……あたし私の感も鈍りましたかね?」

現状を素早く認識し、ハイパーセンサーから得られるデータ全てに視線を走らせるも

「オールグリーン問題なし…ですかい」

「やつた?…折つてやつたわよ…!…一夏あ…――!…

言葉と共に鈴が加速して突っ込んでくる様を上体を反らして紙一重に回避する一夏は

めんどくさそうに言葉を吐く。視界の隅、オールグリーンの横に灯る小さなウサギの「FFORME」を目にしながらに

機体の感覚を…数ミリずつ狂わせてやがりましたか

織斑そりまち一夏ですら化かす天災の所業に溜息を吐くしかないといつ面持ち

訓練であれ、戦闘機動を取つていて一夏すら騙し通せる天災に

もつと……違つことにその労力を割けばいいものを

一夏の実姉が「」の言葉を聞けば、大いに賛同してくれること間違いないことと思いつつ

「そらそらそら――――余所見してんじゃないわよ―――」

「ひら、勘弁で」

チャンスを最大限活用するといつ意気込みのままに偃月刀を縦横無尽に振り回す鈴

対して、一夏はおつかなびくつと擬態しながら逃げの一手を打つ

「ひーーー待ちなさいよーーー」

「古今東西、待てと言つて待つ奴はおりませんよつ……と」

刃の半ばから折れた太刀を量子変換して収納しつつ

マーヤ嬢ちゃん。聞こえますかい？

「」の「ア・ネットワークのプライベートチャンネル越しに真耶を呼び出す

はははい！いーちゃん！だ、大丈夫ですか？！

要らん心配ですわ。それよりも…打鉄の太刀生成レシピ見た
いなもんはありませんかね？

… I-S 委員会が保有する機体と武装の基本概念設計式はありますか？…… そんな物をどうするつもりですか？

見てのお楽しみといつ」とで…

けひつと笑みを浮かべ、真耶が送り出したデータを片手に閲覧しながら

「セリキから…・無視して…・…」

眼前で偃月刀を躍らせながら肉薄している鈴の瞳が据わりながら

「そんなにいいか？！？！お化け胸が！！」

色々と言葉を浴びせているにも関わらず、先ほどよりも応答する数が減っているのが

敏感に感じ取れる鈴は ロア・ネットワークで内緒話していると見切りをつける

完全に合っているのが

「なによーなによーそんなに乳がいいか？！おつきにオッパイが好きかあああああああー！？」

乙女の勘といつモノらしく…

「I-J-H んのああーーー！オッパイ星人があああーーー！」

「いや、別に 私や ^{あたし} そんな拘りないんですけど…？」

鬼気迫る表情で押してくる鈴の勢い任せの攻撃の波に
ヒラヒラと波間を漂う羽毛の如くに避けていく一夏は呆れた声音で
抗弁するも

「問、答、無用……………」

「ひどくないですかい？ソレ…」

激化した鈴には馬の耳に念佛並み

呆れたままに一夏は手にした太刀の生成データを頭に叩き込んで

「やつてみますかね…！」

視界の端に映るウサギの「フルメ絵を一睨みして

中途半端に使える打鉄の演算フリースペースを駆使して一夏は成し
始める

フォールディングナイフを召喚

折れた太刀を召喚

折れた太刀を量子へと変更。舞う淡い光の群れを

慎重に演算しながらにナイフへと纏わせていく

「アンタ？！なにやつて……やらせるかあ…！」

言葉から分かる通りに勘が囁く警戒に従い、圧倒しようとする鈴を交わしながら

生成していく

「たら吹きから鍛錬、省き。積沸かしから生砥^{モリ}をモリモリ。土置き、焼入れはおざなりに。仕上げは捨て」

折れた太刀の破片がナイフを覆つていく

刃先が伸びる。少しずつ、少しずつ

まるで

「持つて……一合、一合つてと」で

脇差のよつな形へと、否…鞘さえあればソレは脇差の模造品へと

「……せ、戦闘機動中に…武器を作っちゃつたつての…?…」

戦慄するは管制塔で一夏と鈴の戦いを見守る技術者達と相対する鈴
真耶も驚きの表情を浮かべるも…普段から驚きなれている故に、鈴
達ほどではなく

「さて、時間も迫つておりますしね…終わらせますかい?」

肉薄する鈴の横腹を両の肩に吊るされた形で乗る装甲を押し当てる
一気に押し出して間合^{あいだ}を退ける

「上等……！」

その一手に綺麗に乗つて、自身で間合いを離した鈴は偃月刀を真つ
直ぐ前へと構えて止まり

一夏の構えは右手を押し出すように前へと掲げ、左手に持つ脇差モ
ドキを刺突の構えに

右手を捨て、左の一刃で刺し倒す一撃でケリをつける体勢

「偃月刀の間合いを忘れてんじゃないわよね…！」

先ほどまでの喚きとは正反対な真剣な面持ちで言葉を紡ぐ鈴の言葉に

「ひへつ、へへへ……」

耳に障る笑い声を微かに上げて一夏は応える

両者、互いに位置あわせ。PHCが齧す不安定な浮遊感を制御しつ
つ静かに滞空し続ける

10秒

20秒

時が刻一刻と流れ行く

3 鳥の鳴き声が響いた

「はつ……」

一閃を先じたのは鈴

脇差と偃月刀のリーチ差を最大限に利用した刺突

物理的な差は

「きへ……」

魔術か奇術か……そんな領域に達した剣腕によつて

「へえつ……へへへ」

覆された。剣爛舞踏ブレイドアーツによつて

「カアツツツツツアツカカカカカ力！……！」

オバーザ・エッジ
真剣

不条理な程に……不利がつけば不利な程に、発した武者の理を上げ
ていく

一刀流最奥の技の一つ。真剣

限定条件可のみにて発せられるこの技

今回の場合は 鈴が刺して来た偃月刀を前へと伸ばした右腕によつて

その刃を上を滑つていくよつて押し出したつつ直下へと体重を掛ける

一つ間違えば

上手く乗れずに手が先端から両端に捌かれるか

自重を乗せる段階において刃先が足を捌くか

はたまた、勢いがついて肩を抉つていいくか

ビのような場合にしろ……失敗すれば命をも奪われる諸刃の剣

だが、しかし……最奥を蘇らせた

魔劍、神劍、等と呼ばれた奥義。インメル・マンター金翅鳥王剣キンシテウを成しえる一夏にひとつ

ては

偃月刀を地に見立て、腕の力だけで自身を舞い上がらせる

鈴の放つた一撃を無力化しつつ、自身の一刀は一撃必殺の構えへと昇華する

刹那の時間の間に

あ…

鈴の視界の先、上方に飛び一夏の姿

真つ直ぐに自身へと舞い降りてくれる姿

その背から舞い降りる

「あ…

真つ直ぐに掌を伸ばす

捕まえたいと、その舞い落ちてくる

黄金の羽

鳥の翼ようごいて

い、ちか…

蜻蛉の羽ようこにも見える

幻想的な羽を掴む為に

鳳鈴音は精一杯、手を伸ばす

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1997x/>

元はチンピラ。今世もチンピラ？

2011年10月29日15時10分発行